



2011年9月7日放送

印象に残る症例①

なかしまこどもクリニック 院長 中島 俊彦

私は岐阜で小児科を開業している中島です。つい7年前までは漢方薬は処方していたものの、本当に効くのかな、またどうやって使えばいいんだろうという状況でした。しかし今では、毎日の診療に漢方薬が欠かせなくなっています。

小児科には毎日カゼを中心とした急性期の病気のお子さんが来院されます。開業してから経験したのは、抗生物質で熱が下がらない、便秘で困っている、いろいろな薬を試したが症状がスッキリ治らない、という相談が非常に多いということでした。

夏カゼの原因は、ほとんどがウイルスで、3日間発熱を認めます。40℃を超える発熱を伴うこともあります。グッタリとしたお子さんに小児科医ができることは、水分補給の指導と点滴をすることでした。

その頃、ツムラさんのセミナーで北海道の井齋偉矢(いさいひでや)先生に出会い、漢方治療の手ほどきを受けました。そこで覚えた麻黄湯を夏カゼに使ったところ、面白しろいように内服後1～2日で解熱します。解熱した後もお子さんがスッキリとした表情をされており、お母さん方から大変感謝されました。それ以来、急性期の病気のほとんどに漢方薬を使うようになり、最近は内科の患者さんの治療にも挑戦しています。

今回は、印象に残る症例の1回目として、「鼻涙管狭窄症」に対する「柴蘇飲」の効果についてお話しします。

症例1は5カ月の女児です。眼脂、流涙を主訴に来院されました。眼科を受診され、通水、ブジーなどの処置を受けていましたが、改善がありませんでした。ツムラ小柴胡湯と香蘇散をそれぞれ0.1g/kg/day 分2で内服しました。内服後1週間で症状が軽快しました。

症例2は2カ月の女児です。左眼脂を主訴に来院されました。症例1と同様に小柴胡湯と香蘇散を内服し、1週間で症状が軽快しました。

症例3は10カ月の女児です。主訴は両眼の涙が止まらない、でした。漢方内服後1週間で涙が止まりました。

症例4は1歳9カ月の男児です。左眼の涙が止まらないという訴えでした。半年間近医で治療を受けていましたが、変化がありませんでした。小柴胡湯合香蘇散を内服して3日間で左眼の流涙が止まりました。

症例5は1歳の男児です。鼻汁が多く、流涙、眼脂があり、眼科でブジーをするも通らず。漢方内服1週間で症状が治まりました。

症例6は5カ月の男児です。右涙嚢炎で眼科を通院中です。流涙、眼脂が止まらず、通水処置を受けました。漢方を内服して、その日のうちに症状が治まりました。

症例7は11カ月の男児です。1週間両眼の流涙、眼脂はあり、眼科で点眼処方を受けましたが変化なし。漢方を内服して3日で治りました。

最後の症例8です。6カ月の女児で、右流涙が多く、漢方内服1週間で治まりました。

鼻涙管狭窄症に対する治療は眼科が主です。点眼、通水、ブジー、手術等の治療が行われます。ツムラ小柴胡湯合香蘇散（柴蘇飲）の成人での症例報告があります。効果が期待できるのは、初発例や病悩期間が10年を超えない、いわゆる「こじれていない」症例であることが示唆されています。

今回は、小児の流涙、眼脂を主訴に来院された患者さんに小柴胡湯合香蘇散を使用してみました。もともとこの組み合わせは柴蘇飲と呼ばれ、耳管狭窄に使われている処方です。井齋先生から、ぜひ小児の鼻涙管狭窄症の症例にも試した下さいという提案がありました。不思議なもので、手ぐすねを引いて待っていると、その月から立て続けに患者さんが来院されました。

使用してみたところ全例で著効であり、病悩期間も数日から数カ月と短かったことにビックリしました。全ての患者さんがうまくいくとは限りませんが、困った時の1つの手として十分武器になると考えられました。

鼻涙管狭窄症、耳管狭窄症に関する古典を拾ってみます。

『金匱要略』の中に越婢加朮湯について記述があります。老人の涙眼、涙道の狭窄、あるいは小児の涙道炎が治ることがあると記載されています。「肉極を治す」と出ていますが、

肉極というのは色が変わったり、盛り上がったりしているという意味があるようです。翼状片に使ってみると具合が良くなるそうですが、涙道が盛り上がって狭くなったということで、鼻涙管狭窄症にも応用できるのです。

柴蘇飲は、本朝経験の漢方でありまして、日本で使われるようになったものですが、出典はよくわかりません。「傷寒を治してのち耳漏、即ち小柴胡湯と香蘇散の合方なり」「此の方は小柴胡湯の証にしてうっ滞を兼るものに用う」とあります。

感冒の後で耳管炎を起こして耳が塞がったようになり、聞こえにくくなった症状にピッタリで、しばしば使われます。急性の耳管狭窄症にはよく効くようで、『衆方規矩』には百発百中の効果があると書いてあります。しかし、慢性の難聴にはあまり有効でないことがあると書いてあります。今回はそれを鼻涙管狭窄症に応用してみました。

鼻涙管狭窄症も耳管狭窄症と同様に急性期によく効くことを経験しました。慢性期に有効かどうかの判定は今後の症例の集積によります。

耳鼻科の先生の治療でよく治るものは、それで良いと思います。しかし、耳鼻科的な治療でうまくいかない時に漢方薬を試してみるのはいかがでしょうか。時々劇的な効果を上げてビックリさせてくれます。全ての患者さんが劇的には治りませんが、治療戦略の1つとして漢方薬を使えることは、現代の小児科医の特権だと思います。気楽に使ってみましょう。

付け加えておきますと、外来で「漢方を試してみる？」と若いお母さん方にお話をすると、まずは「試してみたい！」と反応があり、積極的にお子さんに薬を飲ませてくれます。これは意外な感じがしましたが、漢方薬で病気を治すというニーズが世間で高まっていることを示しているのかなあ、と思っています。お子さんがうまく治ると、お母さん方も自分で飲んでみたい、とおっしゃいます。一度成功体験をされると、気軽に漢方薬を使ってくれます。

現在私が外来で対応している急性期の病気は、急性咽頭炎、扁桃炎、気管支炎、肺炎、急性胃腸炎等です。これらの原因のほとんどがウイルス性であり、対症療法となっています。そこで漢方エキス剤を上手く使うことによって、思いがけず早く病気が治ることを多く経験します。抗アレルギー剤を使うような蕁麻疹に葛根湯を使うなんてこともできます。ぜひ試してみてください。

今後、小児科では急性期だけではなく、慢性期の病気に対しても漢方薬が使用される機会が増えると考えています。